

## 審査員総評

今年度は、小学校から 111 点、中学校から 9 点、合計 120 点の応募がありました。

今回の作文は、授業での体験や身近な人との対話を通して、強く心に残ったことや自分にできることは何かと自分自身を見つめ直すなど、今後の生き方に生かそうとする強い決意が表現された作品が多くありました。

まず、小学校低学年の部で受賞された作文では、身近にある出来事と福祉を関連付け、自分の言葉で生き生きと表現した作品が多くありました。

その中でも、最優秀賞の土佐さんの作文では、家族と買い物に行った際にお年寄りが落とした 1 円玉を拾ったときの様子や自ら進んで家の周りのゴミ拾いを行ったときの自分の気持ちがしっかりと書かれていました。このような行動を通して、「助け合うということは相手のためではなく、自分も気分がよくなること」として、自分自身の心の高まりを実感し、それを素直に表現できた作品でした。

次に、小学校高学年の部で受賞された作文では、福祉の学習を通して障がいへの理解を深めた作品が多く見られました。

その中でも、最優秀賞の板谷さんの作文では、「障害者に対する意識」という題名で、総合的な学習の時間に体験したことや、その時に外部講師から学んだノーマライゼーションという言葉を手掛かりに、障がいに対する考えが書かれていました。様々な体験を通す中で、「障がいはかわいそうではなく、工夫しだいでみんなと同じ生活を送れる」という外部講師の言葉を大切にすることで、自分自身の障害者に対する意識の変容が、しっかりと書かれた作品でした。

次に、中学校の部で受賞された作文では、相手の立場を考えた多面的な視点から福祉を捉えた作品が多くありました。

その中でも、最優秀賞の原さんの作文では、道徳の授業で、新聞の投稿から、相手の立場に立って物事を考えることの大切さを実感し、福祉の視点で、「自立支援介護」という言葉について、自分自身で解釈を深めていく様子が生き生きと書かれていました。そして、これからの少子高齢化社会にあって全ての人が高齢者の気持ちや権利を尊重していく大切さについてもしっかりとまとめられていました。

これからも、多様性を認め、他者を尊重できる社会になるよう、そして、皆さんの温かい思いが、世の中の全ての人に広がっていくことを願って、講評といたします。

最後に、受賞されました皆さん、おめでとうございます。